

座談集

明治の春秋

木村
毅

座談集
明治の春秋

木村
毅

講談社

木村 毅（きむら・き）

1894年（明治27）岡山県に生れる。

1917年（大正6）早稲田大学英文科卒。

現在、明治文化研究会会長 東京都映画協会専務理事

事 松蔭女子学院大学・松蔭短期大学教授。著書多

数あり（著書目録参照）。1979年（昭和54）歿。

© 1979

KI KIMURA

第1刷 昭和54年11月10日



Printed in Japan

落丁本・乱丁本は

お取替え致します

明治の春秋

定価 1300円

著者代表 木村 毅

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112 振替東京 8-3930

電話 東京(945)1111

編集 株式会社 第一出版センター

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

0090-269890-2253 (0) (セ)

明治の春秋 目次

明治の小説・現代の小説 松本清張

—「政治小説」を軸に—

黎明期の少年文学 尾崎秀樹

—明治・大正期の作品と作家たち—

明治の大衆文学 柳田 泉・勝本清一郎・猪野謙二

島村抱月と平野柏蔭 平野 謙

7

49

93

167

文士たちの政治的関心 安藤良雄

多彩な活動の七十年 朝倉治彦・八木福次郎

―創作・出版企画・明治文化研究など―

卷末余筆

著書目録（谷沢永一編）

装幀 森下年昭

座談集
明治の春秋

明治の小説・現代の小説

(昭和五十一年)

——「政治小説」を軸に——

松本 清張
木村 毅

「小説研究十六講」のこと

木村 松本さんと僕の出会いはいはね、あれは僕が産経新聞で月評をやっていたとき、「オール讀物」に懸賞小説の作品が出て、あれは「啾々吟」だったと思うけど、読んで非常におもしろかったので、大いに褒めたんですよ。その前に「西郷札」が出ていて、これもおもしろかったから、大いに褒めた。そうしたら、それから二、三年のちでしたね。松本さんがひょっこり僕の家を訪ねて来たんです。いずれ小説を褒めた御礼に来たのだろうと思ったら、松本さん、そんなことはあつとも言わないでほかの話ばかりして帰っていった。おかしい男だな、と思いましたよ(笑)。

それからまた少しして朝日新聞から電話がかかってきて、僕が昔書いた「小説研究十六講」のことを聞くので、いろいろ説明したんだが、次の日の新聞を見ると「一冊の本」の第一回に松本さんがこの本のことを書いてくれたのが出ておって、その中に、東京に出て来て最初に訪ねていったのは木村氏のところだ、と書いてあった。びっくりしましたね。ははあ、あのときがそうだったのかとわかったんですがね。

あの本はつまらん本のように世間から言われておったから、自分でもそう思っていたのですが、松本さんのあの文を読んで、それ見ろ、と僕は百万の援軍を得たごとく、松本清張ほどの作家を育てた本がほかにあるかと言って、大いに自慢しているんですよ(笑)。

松本 「小説研究十六講」(注1)は名著です。わたしが読んだのは十七、八くらいするときです

が、新潮社のいわゆる「十二講」と「十六講」ものの一つでした。生田長江、中沢臨川などの「近代思想十六講」とか、「世界宗教十二講」などというのもありました。

それで、この本にわたしは感激して、小説の読み方や作法を教えられました。小説に対して自分の気がつかなかったところが、どんどん出ている。小説というものはこういう組み立てをするのだということが、非常に科学的に書かれている。もう一つは、例として引用がいろいろあるわけですね。それもほとんど外国の小説が多かった。それによって、外国文学はこういうものだという、そのサンプルを見せられたようで、わたしは非常に感激して読んだんです。

当時わたしは九州小倉にいて、会社の給仕をしておったのですが、よく使いにやらされる。たとえば、銀行に行くと、窓口から呼び出しがあるまでの待合時間に読むわけです。四六判で四百ページくらいあったし、いまとちがつて紙がいいから重いんです。それでもあれば手放さず持って歩いて、少しずつ読んでいましたね。いまでもそのときの初版本を持っています。もうだいぶん傷んでいますが、非常に貴重なものです。

木村 あの本は無視されていたけれども、どえらく売れたんですよ。大きな本ときでも二十版くらいまで行ったのを覚えている。小さくなってからも売れましたから、二十万以上売れたでしょう。

松本 無視されたわけじゃないけど、入門書というような先入観から、あれを取り上げるのを評論家が沽券にかかわるといふような妙な意識があったからじゃないでしょうか。

木村 谷崎精二君なんかは、早稲田の文科で、僕は木村君のように小説の研究をしたことがない

から、木村君のこの本を使います、と言って講義していらしい。川端康成の小説研究の本や、阿部知二のも僕の本を土台にしたものだ、ということはいろいろな研究者からきいてはいましたが、まあ啓蒙書だとバカにされておったわけですから、あなたが取り上げてくれてとてもうれしかったのですよ。

ただわりあい海外では認められておって、中国で高明という人の翻訳が出てはいるんですが、魯迅と並んだ郁達夫という小説家がおりましたが、彼がこの本を読んでいたらしく、彼の小説論は僕のあれが心棒になっている、ということ、シドニー大学で郁達夫研究をやっているデービスという教授が教えてくれました。

それと坪内（逍遙）さんが非常に褒めてくれましたね。僕は早稲田で劣等生だったから、僕のことなど覚えてないだろうと思っていたのですが、何かの用でお訪ねしたときに、あなたから本をもらったがと、非常に褒めて下さった。まあまあこれでいい、と思ってきましたがね。

松本 あの本だけでなく、先生のいままで書かれた「文芸東西南北」とか、「明治文学展望」とかいくつもございますが、私は非常に愛読してきました。

木村 それはあなたただけだ（笑）。

松本 いやいや、そんなことはない。こういう文学的な考証や題材の探究をやる方がほかにおられます。そして、文章が何よりも興味を誘います。たとえば、明治の政治小説ですがね、「佳人之奇遇」ひとつとっても、先生の「比較文学新視界」に書かれているのは、柳田（泉）先生のそれとは文章が違いますよ。柳田先生は、学術的な意図で書かれたかもしれませんが、ど

れを読んでも総体に文章が面白さには欠けますね。

木村 柳田君の一つの欠陥は、文章の魅力がないことです。あれで文章の魅力があったらかなう者はないですよ。

松本 たしかにそう思いますね。

木村 あれは、現代文学にはほとんど興味はないんで、漢文とか、古代のブルタークの「英雄伝」とかああいうものの造詣は深かったですね。あれの漢学力はたいしたものですよ。幸田露伴のところへ行つて話し相手のできる者は、若いのでは柳田だけだった。それで露伴が非常に柳田君を好んで、遊びにきてくれと言って近づけたんですね。僕は、知り合ったときから、この男がもし、まともに魅力のある文章を書いたら、とてもかなう者はないだろうと思っていました。

柳田という男は仙人のような男で、老子でも読んでおればいいような男ですが、僕があ頃、無産党の役員をして走り回っていたので、柳田が遊びにくるといふと、無産党の話ばかりしたものだから、それから政治的に刺激されて、政治小説に行ったので、放っておいたら、政治なんかに興味を持つ男じゃないんです。

「佳人之奇遇」の狙い

松本 先生は、いまの若い批評家や文学者に、「佳人之奇遇」を改めて読み返している傾向がある、というふうにお書きになっていますね。それは、中村光夫さんとかそのほかの方の文章のこ

とですか。

木村 「佳人之奇遇」は、おそらく柳田泉と僕と、それから小島政二郎さんくらいで、ほかに読んだ人はいないでしょう。

松本 先生の本では、平野謙さんが「佳人之奇遇」を読んでいたと書かれていますか……。

木村 これは東大の教授に反旗をひるがえして、平野謙君や神崎清君や、いま世間に名前を出している人は多くそうですが、柳田のところへ頼ってきたんですよ。柳田が、おれ一人じゃいかにからおまえも出てこいというので僕と柳田とで文学懇談会という東大の人が築いた集まりの世話をしたんです。そのときに柳田が連続講義で「佳人之奇遇」を講義したので、平野君はそれに列している。ほかの人はむずかしいから、いま、読む人ないでしょう。僕らのときだって、むずかしくてみんな読まなかったんだから。

松本 それはおいくつのときですか。

木村 初めて読んだのは僕が十六のときですな。

松本 十六のときに、もうああいうものを……。

木村 だけど、僕らのときは漢学をみんなやっていたものだから。でも、漢学をやっているもむずかしかった。しかし、面白かったから読みましたがね。

松本 先生が、津山の中学ですか、教師が黒板にビクトル・ユーゴーのスペルを書いて、最初のH^gがサイレントだからというのを教えたときに、ほかの生徒はユーゴーが何だか分らなかった。先生はユーゴーを読んでおられたので、心の中で莞爾となさったという……。

木村 それは大阪の英学校でのことです。高等小学校出た年だから、十六のときです。僕は、中学へ行かなかったんです。だから僕の本には、中学の思い出はぜんぜん出てこないんですよ。僕らのときは、高等小学校というのは、ずいぶん程度が高かったんですね。

松本 明治十九年に出た末広鉄腸の「雪中梅」、十八年から二十年にかけて出た東海散士の「佳人之奇遇」など明治十七、八年の自由民権運動昂揚期の政治小説は、柳田先生の分類によるとその第一期にあたる。明治十二、三年から二十年ごろまでの自由民権運動を背景にしているのが、政治小説の第一期で、それからあとの十年間は国権意識の昂揚期を背景にした第二期、そのあとの十一年間は暴露小説とか女権小説とかいわれるもので第三期。だから明治の政治小説は明治十二、三年ごろからあわせて二十四、五年間にもおよぶと柳田先生はいつておられますね。

木村 そう。

松本 その第一期の政治小説の作者の目的ですね。明治十年代の民衆に近代政治というものの何たるかを教える啓蒙小説なのか、それとも、もっと政治的な意図があって、藩閥政治の攻撃が表向きに書けないから、「佳人之奇遇」のように中国、朝鮮、エジプト、メキシコとかの独立運動などの紹介、あるいは弾圧政府に虐げられた一般民衆の蜂起といった話をひいてきて、間接的に藩閥政府打破の観念を民衆に植えつけるという狙いがあったんでしょうか。

木村 そうですね。東海散士は、改進黨に入るには入ったけれども、あの人は民主制の政治というものを一般に教えようと思ってやったと思うんです。だけど、あとの人は矢野龍溪でも、一般の政治というより、改進黨のイデオロギーを言う気持で書いているんじゃないかと思うし、末広

鉄腸も一般の政治教育という意味はないと思いますね。それは、あなたが言ったように、東海散士と、あとの政治小説とは違う。

松本 東海散士の場合は、自分が会津藩の家来で、みずから亡国の臣を体験していますからね。

木村 そうです。来年は、ちょうどアメリカの独立二百年になりますが、東海散士が行っておつた頃は、独立百年前後で、独立の意識がアメリカでも非常に燃えておつたときですね。だから、それを反映していると思います。来年読むのにちょうどいいのは、東海散士の「佳人之奇遇」ですよ。

松本 しかし、見方が非常に堅実な人ですね。新興アメリカの皮相面じゃなくて、かえって虐げられた面に眼をむけていますわね。

木村 そう、まだ東海散士の行っていた頃は、いろいろな国の志士が流れてきてアメリカにたくさんおつたらしいんです。いまもうそんなのいませんがね。

松本 東海散士の小説は文学的にはどうですか。

木村 文学的にもいいと思う。ただ、外国のサンソムなんていう人が、あれを非常に詳しく読んで批評していますけど、西洋の近代史を、亡国を題材にして読者を鼓舞叱咤するのには非常にいい小説だけれども、西洋人が見る小説としては一つ欠陥がある。それは恋愛が燃焼してないというんです。幽蘭という女も東海散士に意があるがごとくなきがごとく、紅蓮という女も意があるがごとくなきがごとく、西洋の特徴だったらここで恋愛的に燃焼するのを期待するけれども、それが無い点が、やはり、日本の小説だということを書いていきますね。